

Environment and Health ISSN 1880-4055

環境と健康

Vol.23 No.2 SUMMER 2010

特集 / 新型インフルエンザにかからないために

いのちの科学 / 臨床心理学からみた「気」の意味

トピックス / ひとはどのように物を見ているか? どうして見えなくなるのか?

随想 / 印刷文化の行方を思う

科学と人生 : 孫との対話

サロン談義 / 生物多様性を考える (I)

連載講座 / 不老長寿を考える (VII)



発売 / 共和書院

特集“新型インフルエンザにかからないために”

感染症は、毎年必ず、話題になるものがいくつかあります。2009年から2010年にかけて、もっとも大きな関心と呼んだのが、新型インフルエンザです。新型インフルエンザは、健康な人も、何かの病気をもった方も、赤ちゃんからお年寄りまで、だれでもかかる最も身近な感染症の一つです。

本年に入って、新型インフルエンザの流行は落ち着いてきましたが、油断は禁物です。また、秋から冬にかけて大流行するかもしれません。本特集をお読みいただき、新型インフルエンザにかからないようにして下さい。



目次

特集／新型インフルエンザにかからないために

Editorial

子は親に似るか？	140
	山岸秀夫

執筆者紹介	145
-------------	-----

特集：新型インフルエンザにかからないために

特集「新型インフルエンザにかからないために」にあたって	147
	今西二郎

新型インフルエンザ流行の現状と対策－行政の立場から－	149
	成瀬昭二

新型インフルエンザウィルスの特徴	160
	大槻公一

新型インフルエンザにかからないための感染対策	170
	藤田直久

新型インフルエンザワクチンの現状と課題	179
	奥野良信

いのちの科学プロジェクトシリーズ

テーマ：共に生きる

②臨床心理学からみた「気」の意味	186
	濱野清志

連載講座

不老長寿を考える（Ⅶ）	193
	山室隆夫

トピックス

ひとはどのように物を見ているか？ どうして見えなくなるのか？	199
	西嶋一晃

随想

印刷文化の行方を思う 206

秋山麗子

科学と人生：孫との対話 209

菅原 努

サロン談義

サロン談義7 生物多様性を考える（I） 214

問題提起：生物多様性を語る

岩槻邦男

コメント1：生物多様性問題－遺伝子多様性の保全について 221

清水 勇

Books

正村俊之 著 229

『グローバルゼーション－現代はいかなる時代なのか』

マリオン・ネッスル 著（久保田裕子、広瀬珠子 訳） 230

『食の安全－政治が操るアメリカの食卓』

前田 暁 著 231

『紙の本が亡びるとき？』

佐々木閑 他4名 著 232

『脳を知る・創る・守る・育む 11』

ピーター・D・ウォード 著（長野 敬、赤松真紀 訳） 233

『地球生命は自滅するのか？ ガイア仮説からメデア仮説へ』

Random Scope

子供に対するサプリメントの与え過ぎに注意 198

アルツハイマー治療薬は再び迷宮入りか？ 227

欧米での化学物質規制には依然として困難な課題がある 228

読者のコーナー 234

おしらせ

第17回いのちの科学フォーラム

「心と身はひとつ－臨床心理学と東洋医学」 247

編集後記	248
投稿規定	249
本誌購読案内	250

執筆者紹介

Editorial: 山岸 秀夫 (やまぎし ひでお)

1934年生まれ。京都大学理学部卒業、京都大学理学研究科博士課程(植物学)終了、理学博士。大阪府立放射線中央研究所技師、カナダ政府 NRC フェロー、米国カーネギー財団フェローを経て、1969年より京都大学理学部生物物理学教室助手、講師、助教授、教授を勤め、1998年停年退官後、財団法人体質研究会主任研究員、NPO さきがけ技術振興会監査。京都大学名誉教授。専門は免疫・分子生物学。著書に「遺伝子を観る」(裳華房)、「免疫系の遺伝子戦略」(共立出版)、「生命と遺伝子」(裳華房)、訳書に「オオノススム、遺伝子重複による進化」(岩波書店)など。

特集: 今西 二郎 (いまにし じろう)

1947年生まれ。京都府立医科大学卒業。同大学院博士課程修了。パリ第7大学留学。現在明治国際医療大学教授、京都府立医科大学名誉教授(免疫・微生物学)。専門は、微生物学、補完・代替医療、統合医療。主な著書に、「微生物学 250 ポイント」金芳堂、「免疫学の入門」金芳堂、「世界の伝統医学」(編著)医歯薬出版、「代替医療のいま」(編著)医歯薬出版、「看護職のための代替療法ガイドブック」(編著)医学書院、「未病の医学」(編著)医歯薬出版、「免疫疾患第2版」(編著)医歯薬出版、「現代西洋医学からみた東洋医学」(編著)医歯薬出版、「医療従事者のための補完・代替医療」(金芳堂)、「病気はなぜ起こる」プリメド社、「メディカル・アロマセラピー」金芳堂など。

成瀬 昭二 (なるせ しょうじ)

京都府立医科大学医学部卒業(1970年)、核磁気共鳴法の医学応用研究にて医学博士(1981年)。京都府立医科大学助手・講師・助教授・准教授(脳神経外科・放射線科)、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校客員准教授・米国ペンシルバニア大学客員教授併任、京都府向陽保健所長、京都府保健福祉部理事を経て京都府健康福祉部医療専門監として、疾病対策・健康予防医学・医療体制など京都府の保健医療行政全般に従事。専門は、医療行政および磁気共鳴医学。研究活動として磁気共鳴画像(MRI)・スペクトル(MRS)の開発・医学応用研究、脳神経疾患の予防研究。著書に「MRスペクトロスコーピーの臨床応用」(編者・共著 医学書院)、「脳科学大辞典」(共著 朝倉書店)、「光が拓く生命科学 第6巻: 光による医学診断」(共著 共立出版)ほか。

大槻 公一 (おおつき こういち)

1942年生まれ。北海道大学獣医学部卒業、獣医学博士(北海道大学)。専門は獣医微生物学、特に鳥類のウイルス性呼吸器感染症病学(鳥インフルエンザ、鶏伝染性気管支炎)。1971年鳥取大学農学部獣医学科講師。助教授を経て1991年から教授。同大学農学部附属家畜病院長、同附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター長を経て、2006年鳥取大学名誉教授並びに特任教授。同年より現在まで京都産業大学客員教授、同大学鳥インフルエンザ研究センター長並びに先端科学技術研究所長。1983年日本獣医学会賞受賞、2005年文部科学大臣表彰。

藤田 直久 (ふじた なおひさ)

1956年生まれ。京都府立医科大学卒業。京都府立医科大学第二内科学教室、同臨床検査医学教室を経て、現在京都府立医科大学感染制御・検査医学准教授、京都府立医科大学附属病院臨床検査部部长および感染対策部部长を兼任。京都府・京都市新型インフルエンザ専門家会議委員。

奥野 良信 (おくの よしのぶ)

1946年生まれ。大阪大学医学部卒業。大阪大学微生物病研究所助教授、大阪府立公衆衛生研究所副所長等を歴任。現在は、阪大微生物病研究会理事、観音寺研究所所長。専門はウイルス学、ワクチン学。フラビウイルス (特にデングウイルス)、インフルエンザウイルス等の血清疫学的、ウイルス学的研究を主要なテーマとしている。

いのちの科学プロジェクトシリーズ：濱野 清志 (はまの きよし)

1956年生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。九州大学助教授を経て京都文教大学臨床心理学部教授。京都大学博士 (教育学)。専門は臨床心理学。そのなかでも、東洋的な見方と心理臨床の関連を研究。著書・訳書に『覚醒する心体』(新曜社)、『世界に宿る魂』J. ヒルマン著 (人文書院)、『ユング心理学辞典』(共訳 創元社) ほか。

連載講座：山室 隆夫 (やまむろ たかお) : 本誌 23 巻 1 号 8 ページに紹介済み

トピックス：西嶋 一晃 (にしじま かずあき)

1966年奈良県生まれ。京都大学医学部卒業。1996-1999年天理よろづ相談所病院眼科勤務を経て、京都大学大学院医学研究科博士課程修了。2003年京都大学医学博士。2003-2006年米国アイテック (株) 特別研究員、2006年京都大学眼科助教、現在に至る。専門は眼科学網膜硝子体疾患で糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、ぶどう膜炎に興味をもって臨床研究を行っている。

随想：秋山 麗子 (あきやま れいこ) : 本誌 23 巻 1 号 9 ページに紹介済み

菅原 努 (すがはら つとむ)

1921年生まれ。京都大学医学部卒業。京都大学医学部長、放射線生物研究センター長、国立京都病院長などを歴任。専門は放射線基礎医学。現在、財団法人慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団理事長、NPO さきがけ技術振興会理事長、京都大学名誉教授。著書に『「安全」のためのリスク学入門』(昭和堂)、「放射線基礎医学」(共著 金芳堂)、「がん・免疫と温熱療法」(共著 岩波書店) ほか。

サロン談義：岩槻 邦男 (いわつき くにお)

1934年兵庫県生まれ。京都大学大学院理学研究科修了。植物分類学専攻。京都大学、東京大学、立教大学、放送大学をへて、兵庫県立人と自然の博物館 (非常勤) 館長、東京大学名誉教授。(社) 日本植物学会、(社) 日本植物園協会、日本植物分類学会、国際植物園連合の会長などを歴任。著書に『生命系—生物多様性の新しい考え』(岩波書店)、『文明が育てた植物たち』(東大出版会)、『生物多様性のいまを語る』(研成社) ほか。

清水 勇 (しみず いさむ)

1945年生まれ。京都大学理学部卒業。京都大学理学部助手、同助教授、ウィーン大学動物学研究所招聘研究員、京大生体生態学センター教授などを経て、2008年定年退職。京都大学名誉教授。財団法人体質研究会主任研究員。専門は環境生態学。著書に「リズム生態学：動物の社会を支えるリズムの仕組み」(編著 東海大出版社)、「生物多様性ってなんだろう：ミツバチのリズムと時計遺伝子」(共著 京都大学学術出版会)「生物多様性のすすめ：見える世界が魚を変える」(共著 丸善株式会社)、「光環境と生物の進化：地球生態系と光環境」(共著 共立出版) など。

特集 “新型インフルエンザにかからないために” にあたって

今西二郎*



インフルエンザが、いつから人類を脅かすようになったのか。記録に残っている限りでは、症状から見ておそらくインフルエンザと推定されるのは、平安時代の貞観5年(863年)である。その後も記録が残されており、貞観14年(872年)、寛弘7年(1010年)、長和4年(1015年)というようにインフルエンザの流行が勃発しているのがわかる。

江戸時代に入ると、それぞれのインフルエンザの流行に対して、特有の名前が付けられるようになった。なかでも有名なものに「谷風」、「お駒風」、「お七風」、「琉球風」などがある。谷風は、当時の名力士、第4代横綱の名前である。正確には2代目谷風梶之助であるが、生前「自分は土俵の上では倒されない。俺を倒せるのは風邪くらいかな」と豪語していたという。寛政6年(1794年)末にインフルエンザにかかり、翌年の1月9日に亡くなったとされている。このことから、1月9日が風邪の日とされたという。「お駒風」

*京都府立医科大学名誉教授(免疫・微生物学)

は、安永5年（1776）にインフルエンザの流行があったが、この時、城木屋お駒という妖婦をモデルにした浄瑠璃が当時はやっていたことからこの名がつけられた。また、「お七風」は、享和年間（1801～1804）ごろ、江戸本郷の八百屋お七の放火事件の後ではやったことから、付けられたようである。さらに、十七屋という江戸・日本橋瀬戸物町にあった飛脚問屋から、インフルエンザが流行しだしたということで、「はやり風邪十七屋からひきはじめ」と川柳に詠まれている。飛脚が、あちこちに回っていくたびに、インフルエンザをはやらせたのかもしれない。

江戸時代のインフルエンザの流行の経過をたどると、ほとんどがまず長崎に発生した。その後、中国地方から上方を経て、関東に到ったものと思われる。さらに奥羽へと広がっていくのである。当時、長崎は唯一の外国に開かれた門戸であったので、インフルエンザは外国から入ってきた感染症であったことをうかがわせるのである。インフルエンザ（influenza）の名前の由来は、中世イタリアの占星術師たちがインフルエンザを「星の影響（Influentiacoele）」と考え、この感染症を「Influenza（インフルエンザ）」と呼んだことによる。なぜ「星の影響」とかということ、大昔の人は夜空の星から神秘的なものが人の身体に“流れ込んで（influere: ラテン語）”その人を支配すると考えていたことによると思われる。

明治時代になって、スペイン風邪（1918年）が大流行し、世界で6億人が感染し、2,500万人の死者が出た。その後も、アジア風邪（1957年）、香港風邪（1968年）、ソ連風邪（1977年）といった大流行があったことは、まだ記憶に残っていることであろう。そして、今回、新型インフルエンザ（ブタ・インフルエンザ）が突然、現れたのである。それまでは、トリ・インフルエンザが新型インフルエンザに変わるものと想定されていたのであるが、現れたのは、ブタ・インフルエンザだった。実は、以前より、教科書的にはトリ→ブタ→ヒトという経路で新型インフルエンザウイルスができてくるとされていたので、われわれ専門家にとっては驚くべきことではなかったのである。

今回の新型インフルエンザについては、幸いなことに、当初の予想と外れて、わが国では、極めて死亡者が少なく、重症化例も少なかったと推定されている。また、ワクチンも最初は、足りないと思われ、海外から緊急輸入までしたが、結果的には、大量に余ってしまった。1月には、急速に流行はおさまり、3月にはほとんど新たな患者がみられなくなった。しかし、本年の秋から、流行はどうなるか予測はつかず、まだまだ予断を許さない状態が続いている。

本特集では、新型インフルエンザについて、行政、ウイルス学、臨床、ワクチンの専門家に寄稿していただいた。新型インフルエンザに対する適切な予防、治療対策をとって、この次のインフルエンザの流行期を元気に乗りきっていただければ、本望である。

（イラスト：京都通信社 中井英之）